



AUE Monthly

2009年12月 1日

第 17 号

編集・発行

愛知教育大学広報部会

TEL 0566-26-2738

FAX 0566-26-2500



目次

行事予定(12月)

トピックス

- ・次世代支援育成シンポジウムを開催
- ・中国駐名古屋総領事館領事が学長を表敬訪問
- ・本学など4者が刈谷市市街地活性化の連携・協力協定を締結
- ・第3回科学・ものづくりフェスタ@愛教大を開催
- ・刈谷産業まつりに本学学生が参加
- ・創立60周年記念コンサートを開催
- ・交通安全講習会を開催
- ・大賞受賞学生らを表彰
- ・秋祭を開催
- ・東アジア教員養成シンポジウムに学長,理事らが出席
- ・オークランド大の博士夫妻が来学

- ・学長が国会議員と面談,本学の実情を説明
- ・ジョグジャカルタ大学と協定締結
- ・生協フェスタを開催
- ・ベルリンの壁崩壊20周年記念展示が開幕
- ・タイムカプセル開封式に学長が出席
- ・菅沼教授らの共同研究論文がNATUREに掲載,記者レクを実施
- ・本学創立60周年記念式典を開催
- ・創立60周年記念講演を連続開催
- ・永年勤続者の表彰式を実施
- ・総合防災・防火訓練を実施
- お知らせ・報告・投稿
- ・大学院修了生の作品が東京国立近代美術館で展示
- ・リポジトリ2000件突破記念インタビュー
- 井戸准教授からのフィンランド便り

行事予定(12月)

- 2日(水) 代議員会(13:00~ 第五会議室)
教授会(代議員会終了後 第一会議室)
教務企画委員会(教授会終了後~ 第二会議室)
学生支援委員会(教授会終了後~ 第五会議室)
- 3日(木) 大学改革推進委員会(16:40 第五会議室)
- 7日(月) 第二期中期目標・中期計画策定委員会(9:30~ 第三会議室)
- 8日(火) 役員会(13:30~ 学長室)
- 9日(水) 代議員会(13:30~ 第五会議室)
教育研究評議会(代議員会終了後 第五会議室)
- 10日(木) 経営協議会(15:00~ KKRホテル名古屋)
- 14日(月) 役員部局長会議(13:30~ 学長室)
- 16日(水) 代議員会(13:00~ 第五会議室)
教員人事委員会(代議員会終了後~ 第三会議室)
- 22日(火) 役員会(13:30~ 学長室)

トピックス

次世代育成支援シンポジウムを開催(11/4)

「次世代育成支援シンポジウム」が11月4日(水)、第二共通棟411教室で開催された。本学の男女共同参画委員会(折出健二委員長)が主催し、船橋恵子・静岡大学副学長(男女共同参画・学生担当)が講演し、参加した約50人の学生、教職員らは熱心に耳を傾けた。

冒頭、折出氏が「職場運営などに課題はあるが、本日の議論を実際のアクションの根拠にできれば意義は大きい」とあいさつ。船橋氏は「子育て支援の新しいステップ」をテーマに基調講演を行い、スウェーデンの育児休業制度や日本と海外の次世代支援の意識の違いなどを明らかにしながら仕事と家庭の両立(ワーク・ライフ・バランス)などについて解説。育児コストの社会化が進行している点を指摘し「国レベルでなすべきことと地域でなければならないことがあり、これを両輪として進めていくべきだと思う」と述べた。

続いてパネリストの岩崎高広・刈谷市次世代育成部子育て支援課長、本学次世代育成支援WG委員の山根真理教授と育児休暇を取った情報図書課主任の古田紀子氏がそれぞれの立場で現状、実績や体験、課題について順次発言した。パネルディスカッションでは同WG委員の中筋由紀子准教授がコーディネーターを務めて議論を深め、企業と地域との連携や育児休業中の職員に研修プログラムを在宅で行うなどスムーズな復帰を促す方策も検討すべきでは、などの具体的な提案が出された。



中国駐名古屋総領事館領事が学長を表敬訪問(11/5)



中国駐名古屋総領事館の梁晋(ヤン・シン)領事=科学技術担当=が11月5日(木)、学長室に松田正久学長を表敬訪問した。梁領事を歓迎した学長が本学と中国の大学との学术交流協定の経緯や留学生の受け入れ、協定校への本学学生の派遣などを説明。梁領事は「中国では日本語を学ぶ学生が増え、日本語の先生が必要です。教育は非常に重要で中国では教師になりたい人も多く、いわば“先生ブーム”です。最近、給料が大幅にアップし、“親方日の丸”なのが人気の秘密で

すね」とジョークを交えながら流暢な日本語で話した。

学長が「アジアの国との交流を広げたい。中国の学生に需要があるようなら、夏休みに本学で学んでもらうサマープログラムを実施したい。中国と日本で(大学同士で単位の互換性がある)ダブルディグリーの制度ができればいいと考えています」と話すと、梁領事は「それはいいアイデアです。二つのプロジェクトはぜひ実現したいですね。文化担当領事ともども喜んでアドバイスをし、楽しみながら応援しますよ」と笑顔で応じた。また、中国では大都市への人口集中を回避するため、地方で豊かな街づくりを進める「小城镇」建設の動きがあるといい、梁領事は中国と本学の教員同士の連携にも関心を示して「人文社会分野で中国と愛知教育大学の教員が協力して街を経済発展させるモデル研究ができればいいですね」と新たな連携の形を模索している様子だった。

その後、本学の大学院に留学している中国人留学生2人も加わり、梁領事は心配事や悩みなどがないかを中国語で話し掛けていたが、留学生は「とても教育環境のすばらしい所で特に不満も

ありません」と流暢な日本語を交えて説明，松田学長は2人に本学に留学した経緯を聞くなどした。留学生の日本語を聞いた梁領事が「愛知教育大学の先生方の指導が素晴らしいですね」と持ち上げると，学長は「お2人が優秀なのですよ」と答えるなど終始和やかな雰囲気にも包まれた。梁領事は，機会を見て再度，本学を訪問することを約束した。学長室では村松常司理事，稲吉隆国際交流室長も同席して2時間余歓談した。

本学など4者が刈谷市市街地活性化の連携・協力協定を締結(11/6)

本学，刈谷市など4者がそれぞれの立場で同市市街地活性化のために力を合わせることで，各代表者が11月6日(金)，刈谷市民会館で「刈谷市中心市街地活性化のための連携・協力に関する協定」の締結式を行った。署名に臨んだのは松田学長，杉浦幸夫・刈谷駅前商店街振興組合理事長，加藤英二・刈谷商工会議所会頭，竹中良則・刈谷市長。



協定書は刈谷市中心市街地の活性化を図るために4者が連携，協力して事業を実施することを目的として，具体的には 中心市街地における賑わいづくり 空き店舗の活用による学生の活動拠点づくり その他中心市街地活性化に関すること—を挙げている。

締結式には本学からは松田学長ほか横地正喜連携担当理事，山本良夫総務課長が，商店街振興組合，会議所，市からもそれぞれ副理事長，副会頭，副市長らも出席し，氏名が紹介された後，各代表が4通の協定書に順次署名し，4人ががっちりと握手した。松田学長が「地域からご支援いただく大学として連携が深まり，市活性化の役に立てればうれしい」とあいさつ。杉浦理事長は「学生の拠点は年内に形をつくり，来年4月から本格稼働させたい」，加藤会頭は「若い学生のアイデアが将来につながると期待しています」と述べ，竹中市長は「市内に国立大学があることは誇りであり，今後さまざまな連携を展開できればありがたい」と協定効果の広がりにも期待感を示した。

続いて報道関係者から空き店舗の今後の活用予定などについて質問があり，本学の宇納一公教授(美術教育)が「ギャラリーや人形劇，食育を兼ねた料理教室などアイデアはあるが店舗を改装してイメージを膨らませながら，参加者を増やして企画を考えていきたい」と説明した。

本学は2007年から同商店街と連携して冬にアクアモールイルミネーション事業を実施しており，地域の評判がよく，風物詩として定着している。学生の活動拠点となる空き店舗は木造2階建てで，当面1階の56平方メートルを改修する。学生にとっては商店街と関わり，社会体験，実践教育の場として活用，地域や子どもたちとの交流の場を通して町づくりに参加することができ，本学の新しい地域連携のあり方として注目される。

第3回科学・ものづくりフェスタ@愛教大を開催(11/7)



「第3回科学・ものづくりフェスタ@愛教大」が11月7日(土)，本学の第一共通棟，天文台で開催され，幼児から高校生まで大勢の人が集まり，教員や学生の指導による面白科学実験やものづくり体験，星空観察会など約40の多彩な科学メニューを楽しんだ。

秋晴れの好天に恵まれたこの日は，開幕の午前10時前から家族連れを含めて多くの子どもたちが来学。

「恐竜のたまごを作ろう」「キャンドルをつくらう!!」などは教室の前に一時行列ができる場面も。

また「宝石研磨教室～勾玉づくり」はすぐに定員に達し，「マイマグネットを作ろう」「厚紙でつくる輪ゴムでっぼう」「おもしろ数学パズル」「マイナス196度の世界」も好評で，付き添

った親が学生らの説明に「知らなかった」「そうだったんだ」と驚きの声を上げ、大きなシャボン玉にすっぽりと包まれた子どもの写真を撮るのに懸命な人の姿も見られた。天文台では、コンピュータ制御の40望遠鏡をのぞいた男子小学6年生の2人は「見えたよ」「へー」「これはすごい」としきりに感心していた。

フェスタは一部を除いて午後4時まで行われ、この日は約1100人が入場、科学の面白さ、不思議さを体感していた。



刈谷産業まつりに本学学生が参加(11/7, 11/8)



11月7日(土)、8日(日)に刈谷市産業振興センターで「2009 刈谷産業まつり」が開催され、初日に本学が初めて参加した。開場に先立ち、開場式が行われ、大学を代表して松田学長も出席した。

参加内容は多岐にわたった。「愛知教育大学をもっと知ろう!」のブースを設け、「地域連携事業のパネル展示」をはじめとして、西村敬子教授の協力による「食まるファイブの紹介」、愛知教育大学生協・附属図書館の協力による「愛知教育大学出版会の図書展示・販売」、宇納教授および2年生の実施による「アクアモールに飾るイルミネーションを作ろう」と題する

子ども向けのワークショップを開催。ワークショップには135人の参加者があり、思い思いの「さかな」をモチーフとしたイルミネーションのパーツを作った。これは11月23日(火)から点灯中の刈谷駅前イルミネーション作品の一つとして展示されている。

また、午前中のステージイベントでは刈谷市立日高小学校の教員、児童の協力による「食まるファイブ」のPR劇が行われ、食の重要について、来場者に楽しく分かりやすくアピールした。

創立60周年記念コンサートを開催(11/11)

創立60周年記念コンサートが11月11日(水)昼、附属図書館2階の多目的利用スペースで開催された。作品展示などが中心だった同スペースでのコンサートは10月28日(水)の学生らによるランチコンサートに次いで2回目。初回が好評で、今回は教員らによる60周年記念イベントとして実現した。

午後0時40分、隈本浩明教授、国府華子准教授のピアノ連弾で開幕。中川洋子教授がソプラノで「象の子」を披露、続いて武本京子教授がピアノソロでショパンの「幻想即興曲」を演奏。新山王政和教授がファゴットソロでリストの「ソナタ第3楽章」を演奏



(ピアノ伴奏は隈本教授)。林剛一教授はバリトン独唱でフィガロの結婚から「もう飛ぶまいぞ、この蝶々」を披露した。さまざまなジャンルの演奏、歌が次々と会場に響きわたり、集まった聴衆約150人は1曲ごとに大きな拍手を送っていた。

最後は合唱で音楽教育講座有志、男性合唱団が橋本剛准教授の指揮で「波へ」「大地讃頌」「学生歌」を熱唱、集まった人は芸術の秋を堪能した。



交通安全講習会を開催(11/11)

本学学生に交通安全への意識を高めてもらおうと「交通安全講習会」が11月11日(水)、講堂で開催された。

2005 年夏に名古屋市内の交通事故で三姉妹の二女（当時 12 歳）を亡くした佐藤逸代さんが「『尊きいのち』をみつめて」と題して講演。事故は信号無視の車が別の車に衝突し、事故に巻き込まれる形で歩道にいた何の罪もない二女が犠牲になった痛ましいもの。

佐藤さんは事故による娘さんの突然の死が信じられなかったという。事故の様子や姉妹がベッドに書き残した悲痛な文字などがスクリーンに映し出されると、時折、ハンカチで目を拭いながら家族の様子などを振り返った。佐藤さんは「事故の真実を知りたい気持ちと知りたくない気持ちで揺れ続けた。しかし、長女は泣き、三女は学校へ行くことができなくなり、しばらくして学校に行ったが、友達に『よく来たね』と言われてまた傷ついた。1 台の車は人の命を奪っただけでなくその家族全員の心を傷つけ、人生を変えた。私が思い出したくない事故のことを皆さんに話すのは、誰にも命を落としてほしくないし、苦しみを背負って生きる人を作ってほしくないからです」と語りかけた。聞き入っていた約 500 人の中には目を潤ませる学生の姿も見られた。

この後、愛知県警住民サービス課の中嶋とも子犯罪被害者支援室長が「犯罪被害者の実情と支援の必要性」について講演。中嶋室長は「ようやく被害者支援が動き出したが、内容充実はこれから。いつ誰が被害者になるかわからない時代だが、地域の人が周囲の人を気遣うなど、人を思いやる心があれば犯罪や事故は減ります」などと犯罪の未然防止をアピールするとともに、被害者への配慮、理解を求めた。



大賞受賞学生らを表彰(11/12)

芸術やスポーツの分野で活躍して本学の名を高めたとして 11 月 12 日（木）、学長室で大学院生、学部学生の表彰式が行われた。表彰されたのは大学院芸術専攻（美術分野）の武村和紀さんら。

武村さんは「神戸ビエンナーレ 2009 現代陶芸コンペティション」で最高賞の大賞を受賞。初等教育・保健体育選修の渡邊千洋さんは「天皇賜杯第 78 回日本学生陸上競技対校選手権大会」女子走幅跳で第 2 位に入賞し、注目を集めた。

2 人には松田学長からそれぞれに表彰状と図書券が贈られた。

また、「第 93 回日本陸上競技選手権リレー競技大会」男子 4×400m リレーにおいて、本学陸上競技部の学生は決勝に進み、第 8 位に入る健闘を見せた。出場した学生 4 人のうち 3 人も学長室で学長に大会の報告を行った。学長は学生全員の努力を讃えた後、記念写真を撮影した。式には陸上競技部顧問の筒井清次郎教授、木越清信講師も同席した。

秋祭を開催(11/14, 11/15)



秋祭が 11 月 14 日（土）、15 日（日）の両日に渡って開催され、スポーツ企画をはじめステージ・出店・ミニゲームが華やかに展開された。

春の大学祭の賑わいには及ばないものの、学生からは出店 6 団体、スポ祭出場 164 チーム、ステージ出場 17 団体の参加があり、それぞれの企画を楽しんでいた。

秋祭実行委員会によれば、同委員会のメンバーは、全員がこの 4 月に入学してきた新 1 年生であり、このメンバーが来年 5 月の大学祭に向けて早速動き出すとのこと。毎年春に開催される大学祭は、このような意欲と用意周到の準備の上に成り立っているようだ。

14 日は朝から雨が降り続け、開催が心配されたが、この日の午後からと 15 日はすっかり晴れ

上がり、少し肌寒さを感じたものの、ステージ企画には近所の小学生も見学を訪れ、生バンドの演奏を楽しんでいた。ステージ上で歌い、踊り、演奏する学生たちは、どの顔も笑顔に満ちあふれ、潑刺としていた。

東アジア教員養成国際シンポジウムに学長、理事らが出席(11/14, 11/15)

11月14日(土)、11月15日(日)の両日、大阪教育大学柏原キャンパスにおいて、第4回東アジア教員養成国際シンポジウムが開催された。

同シンポジウムは、中国・韓国・日本で持ち回り開催となっており、2006年に第1回を東京学芸大学が開催し、その後中国(上海師範大学・華東師範大学)、韓国(公州大学校)の開催を経て、本年度は大阪教育大学柏原キャンパス及び大阪市内のペイタワーホテルを会場とし、京都教育大学、奈良教育大学の3大学が主催した。

シンポジウムのテーマは、「教師教育の質の向上と高度化に向けた今日的課題」で、中国・韓国などから、54名の学長・副学長らが参加、日本側からは、教員養成大学及び総合大学の教育学部の学長・理事らが参加、総勢100人を超えた。

本学からは、松田学長、折出理事、村松理事、地域社会システム講座水野英雄講師、稲吉国際交流室長、中島浩国際交流係長が出席した。

位藤紀美子京都教育大学長が開会の言葉を述べ、長尾彰夫大阪教育大学長が、「日本における教員養成の新しい動向と課題」と題して基調講演を行った。会場では、中国語及び韓国語による同時通訳が行われ、通訳の質の高さを感じさせる場面もあった。

セッションでは、「教師教育の質の向上と高度化に向けた今日的課題」と題して、東京学芸大学をはじめ、日本・中国・韓国の9大学から発表があった。

午後のセッションでは、「教師教育における質的保証の内容とシステムについて」と題して、午前中と同じく、9大学から発表があり、本学の松田学長が英語を交えたプレゼンテーションを行った。最初に「プレゼンの資料で中国語と韓国語に訳した資料が中国と韓国の先生方に配布されていると思うが、これは、本学の留学生が徹夜して翻訳しました」とエピソード披露すると笑い声が漏れ、会場が和んだ。

両セッションの終了後には、質疑応答が行われ、午後のセッションの質疑応答では、説明が長すぎて、司会者が「端的に説明をお願いします」「この問題については、この後の夜のレセプションをお願いします」など時間を区切るのに懸命なほど、白熱した議論が繰り返され、予定の午後6時を回ったところで無事終了した。

翌日のセッションのテーマは、「教師の継続教育をめぐる今日的課題」について議論され、中国の華東師範大学、韓国の公州大学校、北海道教育大学、福岡教育大学等の発表が続いた。9大学から発表があり、終了後の質疑応答は、前日に劣らぬ熱心ぶりだった。最後に長友恒人奈良教育大学長が今回の国際シンポジウムに対し謝辞を述べ、2日間にわたる熱心な議論が続いた会を締めくくった。

なお、一日目の昼には、東アジア学長フォーラムが開催され、今後の会議の持ち方、東アジア教員養成コンソーシアムの結成大会(12月18日、東京で)や、今後の運営などが議論され、2010年は中国の北京師範大学が主催し、中国での開催が決まった。また各国の事務局として、日本は東京学芸大学、中国は北京師範大学、韓国は公州大学校に置くことも確認された。



オークランド大の博士夫妻が来学(11/16)

ニュージーランドのオークランド大学教育学部ケヴィン・モラン博士夫妻が11月16日(月)、本学を訪問した。当日は、松田学長が出張で不在のため、村松理事(国際交流センター長)が2人を学長室で歓迎した。

今回の来日の目的は、慶應義塾大学で開催された日本水泳水中運動学会の年次大会にゲストスピーカーとして、本学の保健体育講座の合屋十四秋教授が招いたもので、本学とは姉妹校ということもあり、この日の訪問となった。



また、文部科学省科学研究費補助金による共同研究者として、本学で研究打ち合わせを行った。その後、京都工芸繊維大学及び鳴門教育大学においても今後の国際プロジェクト研究の意見交換と研究打ち合わせを行った。

本学での懇談には、合屋教授も出席し、村松理事、稲吉国際交流室長、国際交流アソシエイトも同席。ケヴィン博士は東京滞在での出来事をジェスチャーを交えてユーモアに話すなど、終始和やかな雰囲気の中で情報交換を行い、予定時間をオーバーするなど話が弾んだ。

本学とオークランド大学との学術交流協定について、結果的には締結に至らなかったことの説明があり、今後は教育学部同士で交流を深め、実績を積み重ねた後に、再度学術交流協定を提案することを確認し合った。

村松理事からは「できることから少しずつ交流を積み重ねることが重要です。本学でも、留学生向けには英語で授業を行い、単位が取れるよう検討していきたい」と話すと、ケヴィン博士も「今後も大学間の交流協定が締結できるよう協力していきたい」などと語った。

会談後は、建物の屋上から大学キャンパスを一望して景色を楽しみ、附属図書館では、書道展が開催されており、熱心に書を見るなど短いキャンパスツアーを堪能した。

その後は、本学水泳部の学生たちとも交流するなど、本学での短い滞在を精力的にこなした。

学長が国会議員と面談、本学の実情を説明(11/18)

松田学長は11月18日(水)、東京の国会議員事務所などを訪問し、愛知県、東海比例選出の民主党議員らに国立大学、教育大学の現状を説明、理解と協力を求めるとともに、同月21日(土)の創立60周年記念式典への出席を改めて要請するなどした。また、民主党の小沢一郎幹事長を表敬訪問、本学を紹介した。

議員会館の事務所や開会中の国会で学長が面談したのは木俣佳丈参院議員、佐藤泰介参院議員、荒木清寛参院議員、谷岡郁子参院議員、中根康治衆院議員、鈴木政二参院議員、鈴木克昌衆院議員、佐々木憲昭衆院議員、三輪信昭衆院議員(訪問順)。

ほかに大村秀章衆院議員、牧義夫衆院議員、石田芳弘衆院議員の事務所では議員不在のため秘書へのあいさつとなったが、民主8人、自民2人、公明、共産各1人と超党派の議員計12人に理解を求める活動となった。

学長が各議員に国立大学、教育大学の厳しい運営状況などを説明すると、多くの議員が教育の重要性、高等教育への予算配分に理解を示し、中には地域に貢献している本学への寄附を企業に呼び掛けてみたいと支援に意欲を見せる議員もいた。

学長は幹事長室に小沢一郎民主党幹事長を表敬訪問。本学の歴史や教育大学の特徴や運営の難しさなどを話した。小沢幹事長は学長の話にじっと耳を傾け、うなずくなどしていた。最後に2人は笑顔で握手をして写真撮影、約10分間の面談を終えた。



ジョグジャカルタ大学と協定締結(11/19)

本学は、インドネシア・国立ジョグジャカルタ大学との間で、学術交流に関する協定及び学生交流に関する覚書を締結した。



11月19日(木)にジョグジャカルタ大学長のロハムット・ワハビ学長はじめ、副学長・学部長等一行9人が愛知教育大学を訪問し、本学の松田学長とともに両学長が署名する調印式が執り行われた。

国立ジョグジャカルタ大学は、インドネシア・ジャワ島の中部に位置し、ポロブドール遺跡やプランバナン遺跡などの世界遺産がある古都ジョグジャカルタにある。1999年8月にジョグジャカルタ教員養成・教育科学学院が大学に昇格したもので、数学自然科学学部、工学部、

教育科学学部、言語学芸学部、社会科学・経済学部、体育科学部の6学部と大学院修士・博士課程を設置し、学生数は約2万人を擁する。教員養成を主眼に据えており、科学・技術・学芸分野における教育・専門プログラムの実施と、教育科学と教授科学の発展及び教育分野における専門家・研究者の育成を含む様々な機能を果たしている。

2008年には同大学交流担当理事スギン氏、社会科学部長サルディマン氏、交流部長ストリスマナ氏が、愛知教育大学歴史学会に参加し、講演を行っており、その際に、愛知教育大学学長を表敬訪問し、学術交流協定締結に向けての検討を行った。その後、愛知教育大学社会科教育講座の土屋武志教授がジョグジャカルタ大学の国際会議に招待されるなど交流の実績を積み、今回の協定締結となった。今後、学生交流や学術交流の両面で活発な交流が期待される。

今回の協定で、愛知教育大学の協定校は、計12か国17機関となった。また、インドネシアの大学としては、2005年3月に国立スラバヤ大学と学術交流協定を締結しており、今回の締結により、2校目となった。

生協フェスタを開催(11/19)

生協フェスタが11月19日(木)、20日(金)に本学の第一福利施設周辺などで開催された。健康の大切さ、生活を見直すきっかけの場にするとともに組合員に生協や共済に関心を持ってもらうのが狙い。

同施設前にはテントが張られ、体脂肪、肌水分、肺活量の測定、スタンプラリー、自転車の修理・点検や学内の危険マップの展示などが行われ、昼休みなどには学生の行列ができていた。施設内では南医療生協による脂肪と筋肉のバランスを見る体組成計測が行われ、学生が指示に従って計測していた。テントを訪れたのは2日間で250人に上り、「楽しめた」「意外にためになった」などの声が寄せられたという。また、食堂の特別メニューやサラダバーで200円をずばり当てると無料となるイベントもフェスタに合わせて開催された。



ベルリンの壁崩壊20周年記念展示が開幕(11/19)



ベルリンの壁崩壊20周年記念展示が11月19日(木)、附属図書館2階の多目的利用スペースで始まった。1989年、分断されていた東西ドイツの境界にあった壁(長さ155*、およそ名古屋富山間に相当)が消滅して11月9日(月)がちょうど20年目。同展は「旧東ドイツの崩壊とドイツ再統一」の副題で、冷戦の終結がここから始まった歴史をパネル写真で知ってもらうのが目的。

パネルは公益ヘルティ財団が協賛，ドイツ外務省の後援で作成されたもので，全国の大学，図書館，市役所などで展示されており，本学の外国語講座マイヤー・オリバー准教授がコーディネーターを務めて大学院生らと準備をしてきた。20点のパネルは「平和革命から再統一へ」から経済危機の「つのる不安」，出国現象の「別れ」，各地のデモによる「転換」から「壁の崩壊」「ひとつに」まで歴史を振り返る。現在のベルリンの写真など20点余，壁崩壊の新聞記事，関係図書も展示。学生らは熱心に写真を見ていた。

“一つの壁”が社会主義と資本主義の世界を分断し，両国国民は28年間厳しい統制下に置かれ，肉親といえども再会できなかった。関係者は「壁の崩壊による平和革命から再統一への歴史を学んでほしい」と話している。

同展は12月18日（金）まで。入場無料。

タイムカプセルの開封式に学長が出席(11/20)

1979年の国際児童年を記念して愛知県教育委員会，毎日新聞社が同県長久手町の愛・地球博記念公園に埋めたタイムカプセル2基の開封式が11月20日（金），同公園内で行われた。式には本学の松田学長，神田真秋愛知県知事ら来賓をはじめ，30年前に作文や絵などを制作，現在は30～40代となった男女約100人も出席した。

主催者のあいさつ，埋設当時のスライド，掘り起こしのビデオなどの上映に続いてステージ上に置かれた作文，絵や当時の資料などが入った2基のカプセルの除幕式が行われ，松田学長らがひもを引いて，カプセルの中が公開された。収納されていた作詞家の故阿久悠さんのメッセージ「30年後の子どもたちへ贈る言葉」が読み上げられ，現在の小学生から当時の作者に作文，絵などが手渡されると，会場から大きな拍手が送られた。

30年前に自分が描いた絵と対面した男性は「絵の色が褪せておらず，当時のままであることに驚き，改めて力をもらいました」と感激した様子で語り，過去の自分との再会を喜んでいた。



菅沼教授らの共同研究論文がNATUREに掲載，記者レクを実施(11/20)



本学の菅沼教授らによる共同研究論文が11月26日（木）発売の英国科学誌「NATURE」に掲載された。これを前に同教授は11月20日（金）に本学で臨時の記者会見を行い，研究の背景，成果などを詳しく解説した。本学自然科学棟3階ゼミナール室で行われた会見には全国紙記者ら数社の記者が出席，教授の説明に聞き入った。

論文は教授を中心とする全国の7研究機関19人による共同研究で，テーマは「根粒菌の共生窒素固定に必須な宿主マメ科植物遺伝子の発見と機能解明」。肥料から窒素を取り入れて生育する植物が多いが，マメ科植物は空中窒素を活用して生育する。教授らはミヤコグサの根粒は形成されるが窒素固定しない変異体を研究し，根粒に特異なマメ科植物遺伝子が共生する根粒菌の窒素固定酵素（ニトロゲナーゼ）の活性中心の形成に関与していることを発見した。なぜ根粒菌はマメ科植物との共生によってのみ高い窒素固定能力を発揮するのかの手がかりを得た学術的に重要な研究で，NATUREも研究成果を高く評価したとみられる。今後，マメ科植物以外での共生窒素固定能力の利用が期待される。

記者の質問に答えた教授は「化学肥料を使わずに作物を生育させるには，さらなる研究が必要だが，（研究成果が）将来的には地球環境保全につながる可能性はあると思う」と語った。

菅沼教授らの研究は新聞各紙の11月26日（木）付朝刊に掲載された。

論文掲載を記念して菅沼教授に，喜びの声を聞いた。

【菅沼教授インタビュー】

NATUREへの論文掲載の率直な感想を。

「うれしかったですね。複数の知り合いから早速、お祝いの言葉をもらいました。生物分野では掲載は名誉なことで、最初は信じられませんでしたね」

初めにマメ科の研究を始めたのはいつですか？

「マメ科の窒素固定は 27 年前からやってきたことになりました。この間、米国の大学でエンドウ豆の変異体を研究。1998 年にミヤコグサの変異体研究を持ちかけられて共同研究。いろいろな方のサポートがありました。実は変異体を 3 種いただき、そのうちの一つが今回の発見につながりました。それは偶然ですね」

遺伝子の発見と機能解明は偶然ではありませんね。

「そうですね。地道に可能性を点検してきて最後に残ったものが面白い結果につながり、今回の発見にたどり着きました。時間をかけた分、いい形でまとめることができました」

マメ科の植物の遺伝子組み換えで窒素固定の能力を高めて、生育しやすくする可能性が高まったのでは？他の作物への展望も開けたのでは。

「例えば大豆も少しの肥料を使っています。その分を窒素固定能力の向上で補えばいいですし、他の作物に展開できれば面白い研究になっていくと思います」

先生ご自身の抱負と学生へのメッセージを。

「いただいた変異体の一つはまだ研究中で、可能性を追求して論文をまとめたい。また窒素固定能力を高める遺伝子は複数あるとみられ、メカニズムの全容を解明したいと思っています。学生に言いたいのはひたすらコツコツとあきらめずに学習、研究をやってほしいということですね。私もその思いでやってきましたが、続けていればいつか芽が出るし、評価される日が来ますよ」



本学創立 60 周年記念式典を開催(11/21)



本学の「創立 60 周年記念式典」が 11 月 21 日（土）午前 10 時半から、講堂で開催された。文部科学大臣代理の小松親次郎大臣官房審議官、愛知県知事代理の今井秀明県教育委員会教育長、名古屋市長代理の山田哲郎市教育委員会教育次長、竹中良則刈谷市長、地元国会議員や各国立大学学長ら来賓をはじめ同窓生、学生ら約 400 人が出席して行われた。

松田学長が「本学は中部地区最大の教員養成大学として力を尽くし、創立以来、学部、大学院で合

わせて約 5 万人の卒業生、修了生を世に送り出してきました。60 年を経て初めての政権交代の現実の中にいますが、高等教育機関としての本学の役割は益々重要となると確信しています。関係の方々のご苦労に感謝し、新たな本学の発展の道筋を築くのが責任と自覚して身が引き締まる思いです」と式辞を述べた。

小松文科省審議官は「愛知教育大学はこれまで優れた人材を輩出し、特別支援教育、科学ものづくり、外国人児童教育などで広く社会に貢献してきた。教育の使命を果たすため尽力に期待します」と祝辞。今井県教育長、山田市教育次長らは「愛知教育大学の社会貢献に敬意を表し、さらなる進展を」「学校教育への経験を発展させることを祈念します」などと期待を表明した。また、来賓で本学卒業生でもある佐藤泰介参院議員は「学生がお金の心配をすることなく学ぶことができる流れを愛知から中部、日本へと広げ、大学として優秀な人材を輩出し続けることを期待します」と激励した。

この後、大学会館大集会室で 60 周年記念祝賀会を開催。折出副学長が「これからの本学にと

って『つながり』『コミュニケーション』『愛教大らしさ』という三つのキーワードが大切。この日を新しい出発にしたい」とあいさつ。各界の来賓による祝辞があり、節目の年を祝った。再び講堂では午後2時から記念講演会を開催。愛知教育大学吹奏楽団の演奏のあと、スポーツアナリストで元NHK解説委員・アナウンサーの西田善夫氏が「人を育てるとは！ スポーツアナリストの教育論」をテーマに講演した。西田氏は高校野球の名監督、木内幸男氏が1984年の夏の甲子園大会で取手二高を率い、桑田真澄、清原和博両選手の強力コンビがいたPL学園を10回延長の末に破り、全国制覇を果たした模様を実況中継しながら再現した。西田氏は選手が緊張する場面で監督がプレッシャーを与えることなく、選手の力をうまく引き出したのが勝因につながったと指摘。よどみなく流れる口調とユーモア溢れる講演に会場からは時折、笑い声が漏れ、聴衆はスポーツを通しての教育の神髄に触れ、感動を味わっていた。

創立60周年記念講演を連続開催(11/18)

創立60周年の記念事業としての連続講演が11月18日(水)、始まった。第一弾の「グローバルイゼーションと日本」と題した国際連合地域開発センター所長、小野川和延氏による講演は同日、第二共通棟411教室で行われ、学生をはじめ一般視聴者も訪れ、会場には100人ほどが集まった。



小野川氏は、旧環境庁に入庁後世界各国で活躍した実績から、国際連合地域開発センターでは地域間経済格差の是正を最大テーマとして取り組み、アジアにおける日本がどのように見られているかを紹介。特に「日本の長所は、新幹線などに見られる過密なダイヤを制御できるシステムで、これができるのは日本人だけである。また、治安が安定、豊かで食べていくことに関しては困らない国でもある。しかしながら短所として、高等教育で英語やラテン系の言語を使わない国も日本だけであり、食べていくことに困らないということは逆にやらなきゃいけないという危機感が薄くなってきているともいえる」など、「1億総中流」といわれた時代背景に格差のない社会が形成されてきたことを述べた。

また、第二弾は「個に応じる教育を考える 一斉画一授業改革のための方略」と題した上智大学名誉教授の加藤幸次氏(愛知学芸大学・昭和33年3月卒業)による講演で、11月23日(祝、月)に行われ、会場の第二共通棟431教室には、教育関係者をはじめ一般からの視聴者ら約140人が集まった。



加藤氏は、個の充実が集団を強くすること、アメリカの教育では、初等教育、中等教育、高等教育と教育段階が高くなるにつれ「討論」することに主眼が置かれているが、日本では、アメリカとは逆に中等教育以降、ほとんど討論がない授業となっており、日米で文化的差異の問題もあるが、個の力をつけさせる教育が必要であると述べた。講演の後半は、会場からの質問・意見に対するディスカッションが活発に行われ、充実した討論の中で会は終了した。

第三弾の河上亮一・日本教育大学院大学教授による講演会は11月25日(木)、第二共通棟431教室で開催された。河上氏は「学校の役割と教師の仕事」をテーマに教育は近代社会で子どもが生きていくための文化の押しつけで「もともと暴力的で理不尽なものだが、大人がひるんでしまうと子どもが生きていくことは難しい」などと持論を展開。その上で教育を第1次教育(家庭・地域社会)、第2次教育(学校)、第3次教育(個人)の3段階に分けて説明。特に第2次教育では



国家が作ったものが学校で、目標は子どもの社会的自立であり、内容は市民生活能力、国民としての能力、政治参加能力の育成と指摘した。また、日本の学校の特徴、特殊性は生活教育が生み出す秩序と生徒の安定の上に教科教育を行うシステムであることと言い、教科のみの欧米の学校との違いを鮮明にした。教育の課題などを図を描くなどして熱心に語る河上氏の話に約 100 人の聴衆は真剣な表情で聞き入った。会場からは質問も出され、閉会予定時間を 40 分もオーバー、最後に河上氏には大きな拍手が送られた。

なお、記念講演会は 12 月 5 日（土）、12 月 12 日（土）も開催される。5 日は午前 10 時～午後零時半、本学第二共通棟 411 教室で「地域連携フォーラム 2009」があり、同 412 教室ではパネル展示も行われる。また同日午後 2 時～3 時半には作家で本学OBの清水義範氏が第二共通棟 431 教室で「日本語は変わっていく」をテーマに講演。連続記念講演を締めくくる 12 日は午後 2 時～3 時半には元高校教諭、宮本延春氏が第二共通棟 431 教室で「未来の君が待つ場所へ」をテーマに講演する。いずれも参加無料。こぞって参加してください。

永年勤続者の表彰式を実施(11/24)

本学の役職員永年勤続者表彰式が 11 月 24 日（火）、第五会議室で行われた。表彰されたのは宮川秀俊教授（技術教育）はじめ教職員計 11 人（当日の出席者は 5 人）。松田学長が 1 人ひとりに表彰状を手渡した。

学長は「本学には学生が十分な教育を受けられるようバックアップしていく責務があります。皆さんの貢献に感謝し、今後もその蓄積を生かしていただきたい」とあいさつ。宮川教授が被表彰者を代表して「われわれの今があるのも相談に乗っていただいた方々のおかげ。課題に対処し、本学の発展に寄与したい」とお礼と決意の言葉を述べ、講堂前で本学役員らと記念写真を撮影。引き続き、昼食会が行われ、短時間ながら食事をとりながら懇談した。



総合防災・防火訓練を実施(11/26)



本年度の総合防災・防火訓練が 11 月 26 日（木）午後、本学で実施された。午後 3 時 15 分、震度 6 強の東海地震が発生し、自然科学棟では火災が発生したとの想定で、学生が第一共通棟、第二共通棟から続々外に避難。本部棟では執務中の職員が約 30 秒の揺れが収まったところで、火気などの安全を確認して、足早に外へ避難した。

講堂前には災害対策本部が置かれ、松田学長の命を受けた折出理事（消防隊長）が総指揮を執り、救出、消火、警備など各班からの状況報告が次々と寄せられた。通信訓練を含めて職員らは本番さながらにきびきびと活動、真剣な表情で訓練を行った。

この後、初期消火訓練を行い、学生や職員が消火器を使つて的を倒した。最後に学長が「いつかはわからないが、東海地震は必ず起こる。本当に起きたら訓練のようには行かないかもしれないが、そのときに備える気持ちを持ち続け、キャンパスを守っていただきたい」と講評、訓練を終了した。

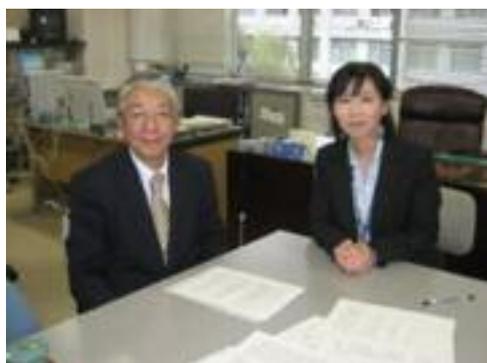


お知らせ・投稿・報告

大学院修了生の作品が東京国立近代美術館で展示(10/14～来年 1/31)

11月14日(土)から東京国立近代美術館工芸館で始まった「現代工芸への視点・装飾の力」に本学大学院芸術教育専攻修了生、田中知美さんの作品が展示されている。「care 2006」で羽のような薄いシートを幾重にも細かく合わせて造形表した作品。田中さんの作品は2009年1,2月に三重県菰野街の「財団法人パラミタ・ミュージアム」で展示され、絶賛された。今回の展示は2010年1月31日(日)まで。

リポジトリ登録件数 2000 件突破記念インタビュー(11/11)



本学の教員の研究・教育成果をインターネット上で公開する「愛知教育大学学術情報リポジトリ」が、11月2日(月)に登録件数 2000 件を突破した。附属図書館ではこの 2000 件突破を記念して、2000 件目の論文となった「進路指導におけるキャリア発達の理論」を提供した学校教育講座 坂柳教授にインタビューをおこなった。

インタビューでは、坂柳教授が自身の研究テーマである「キャリア発達」「キャリア・カウンセリング」について分かりやすく説明した。また、関連して現在の職業問題である「ニート」「若者の離職」をとりあげ、「自己肯定感の育成」の必要性を熱く語った。キャリア教育に興味のある方をはじめとして、教育に関わる方々に是非読んでいただきたい内容となっている。

インタビュー内容はリポジトリトップページよりリンクして、次の URL で一般に公開している。

登録件数 2000 件突破記念インタビュー

<http://repository.aichi-edu.ac.jp/interview/interview2000.html>

井戸准教授からのフィンランド便り (投稿)



ヘルシンキはクリスマスムード一色になってきました。午後3時過ぎに薄暗くなる街にはイルミネーションが効果的に灯り、平日でも人で溢れ返っています。また、普段は休みの週末も今の時期は多くのショップが営業しています。しかしそれはクリスマス前までだけで、12月も23日くらいになると街はとても静かになってしまうようです。そしてクリスマスは皆家族で迎え、日本のように街に繰り出して騒ぐようなことはここでは見られません。大学も段々とクリスマスムードが高まり、先週末は学生達が各々の作品を売るクリスマスマーケットが開かれました。毎年この時期になると学生達は課題もそこそこに、マーケットで販売するための作品を一生懸命作っているようです。また、教授をはじめスタッフ学生共々、クリスマスが近づき気持ちがそわそわしていることを、端から見ても何となく感じます。それだけこの国におけるクリスマスの存在意義は大きい訳ですが、残念ながら私にはまだ良

く分かりません。

今回は私も共に受け持っている大学院授業の一つを少し御紹介したいと思います。この大学でも様々な授業の中から学生各々が好きなもの、興味のあるものを選択し単位を取得するまでは、多くの大学がそうであるように同じなのですが、分野を横断してどんな授業でも選択出来ることから、その幅の広さはとても羨ましく思う程あります。そのことから現在受け持っている「Cook Book Project」という授業にも様々な専攻



の学生が集まって来ており、学生も自分の専門にだけ専念しようという意識は低いように思われます。それがために多くの学生が広い知識と技術を身につけていることは、アイデアのプレゼンテーションからも一目瞭然です。また、留学生が非常に多いことから、この授業では学生達が毎回自分のお国料理を振る舞ってくれ、皆で様々な国の食文化を体験しています。最終的には数多くある食文化を背景に、テーブルウェア、キッチンウェア、住空間を含めた料理本を制作し、プレゼンテーションに臨みます。リサーチから着地点まで非常に長い道を経るとい、ハードですが大変有効的な授業が組み立てられていると感じました。いよいよ二週間後には最終プレゼンテーションを控え、現在学生達はその準備に追われています。

さて、今年もあと残すところ1カ月となり、初めて体験するクリスマス、年越しが近づいてきましたが、年内と決めたプロジェクトをクリアするためにも土日返上で頑張りたいと思います。

(井戸 真伸)

編集後記

本号は試行的に「一般公開」されることになりました。「AUE Monthly」はこれまで本学ホームページの訪問者別メニュー「在学生」をクリックして本学関係者のみが見ることができました。しかし、内容的に本学をアピールする材料が多い、などとの広報部会の議論を経て今回、学外の方にも見てもらい、ご意見をいただくことにしました。本学教職員の協力で作成、広報が編集していますが、注意が行き届かない点、改善の余地は多々あると思っています。来年の1月号を含む2回の試行を経て今後の公開方針を検討する予定です。読み応えのある本学の魅力発信源を目指しますので今後ともご愛読をよろしく願います。(N)

投稿のお願い

学内外の出来事(教育・研究・地域連携・国際交流・学内事業など)に関するニュースの提供をお待ちしております。

編集責任者:総務担当理事 折出 健二